注目！

垂水島津家歴代当主の墓碑

6代・忠紀に供えられた六面地蔵塔

六面地蔵塔

垂水島津家墓所には、墓碑だけではなく、当主または当主夫人へ供えられた供養塔である六面地蔵塔が多数存在する。これも垂水島津家墓所の特徴である。

ひさのぶ
4代・久信
2代・以久が佐土原領主となったため、大隅を譲られる。垂水城が手狭になったため、林之城を築城。

てるひさ
3代・彰久
3代・彰久は16代・貴暢と安置されているため墓碑は、ありません。

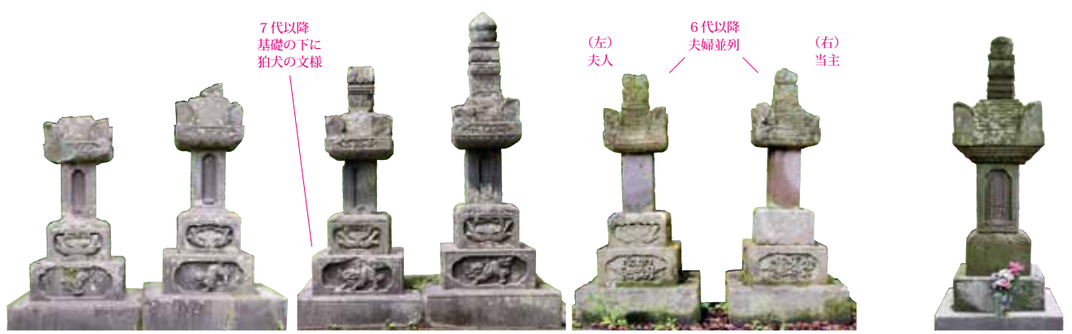
朝鮮出兵で病没。朝鮮での家臣の虎退治の逸話が伝わる。妻は本家義久の次女で「新城様」と言われた。

ゆきひさ
2代・以久
慶長8年（1603年）に佐土原藩主となったため、墓碑は、ありません。

伊地知氏を降したのち、領主として種子島から垂水に入城。後に宮崎の佐土原へ移る。（佐土原藩の初代。）

ただまさ
初代・忠将
初代・忠将は16代・貴暢と安置されているため墓碑は、ありません。

父忠良や兄貴久に従い、伊作島津の基礎を固め、さまざまな戦功を上げたが、福山・廻城の戦いで陣没。



8代・忠直
本家綱貴の三男。久治の養子となる。綱貴の命により華厳寺を建立。現在の市立図書館付近にあった。

7代・久治
よめじょ川用水の計画を立て、必要な基金を積み立てた。整備工事は、9代・貴儔の頃まで続いた。

6代・忠紀
本家家久の三男久貞が一旦は垂水家の養子となるが、都城領主北郷氏の養子となったため、七男忠紀が家督を継ぐ。

5代・久敏
4代・久信が鹿屋に隠居し、家督を継ぐ。江戸で瘴癘（伝染性の熱病）に罹患。そのまま病没。

垂水島津家略系図

- 島津忠良（日新斎）
  - 忠良の次男
- **初代・忠将**　永正17（1520）～　永禄 4（1561）（42）
- **2代・以久**　天文19（1550）～　慶長15（1610）（61）
- **3代・彰久**　永禄10（1567）～　文禄 4（1595）（29）
- **4代・久信**　天正13（1585）～　寛永14（1637）（53）
- **5代・久敏**　慶長07（1602）～　寛永元（1624）（23）
- **6代・忠紀**　元和 8（1622）～　正保 4（1647）（26）
- **7代・久治**　正保 2（1645）～　元禄 4（1692）（48）
- **8代・忠直**　貞享 5（1688）～　正徳元（1711）（24）
- **9代・貴儔**　宝永 5（1708）～　寛政 3（1791）（84）
- **10代・貴澄**　元文 3（1738）～　文化 4（1807）（70）
- **11代・貴品**　宝暦 7（1757）～　文化13（1816）（60）
- **12代・貴柄**　寛政 3（1791）～　天保 4（1833）（43）
- **13代・貴典**　文化 7（1810）～　元治 2（1865）（56）
- **14代・貴敦**　天保 3（1832）～　明治23（1890）（59）
- **15代・貴徳**　万延元（1860）～　明治25（1892）（32）
- **16代・貴暢**　明治20（1887）～　昭和27（1952）（65）
- **当主**　生年●（0000）～　没年●（0000）（享年）

※ピンクは本家等養子

たかもと
12代・貴柄
11代・貴品の長男。貴品の死後、家督を継ぐ。本家斉宣が領内巡検の際、来垂。天保4年（1833年）に亡くなる。

たかしな
11代・貴品
日置城主島津佐衛門久寧の長男。10代・貴澄の婿養子。公儀天文方であった伊能忠敬が沿岸測量のため来垂。

たかすみ
10代・貴澄
学問所「文行館」を設立。家臣団による和歌、漢詩集が多数作られる。桜島安永噴火で松岳寺に桜島焼亡塔を建立。

たかとも
9代・貴儔
本藩の筆頭家老も勤めた。よめじょ川用水が完成し、新御堂に新田を開拓。垂水の商店街の基礎も築いたとされる。

16代・貴暢
垂水家最後の当主。明治30年（1897年）に男爵に叙せられた。妻草子は、日本初の医学文学博士。

15代・貴徳
市内小学校（垂水小・柊原小・水之上小・協和小）の校長を務める。駕籠に乗って登校していたと云われている。

14代・貴敦
薩英戦争では鹿児島の守備を行い、戊辰戦争へ垂水から172名を派兵。明治2年（1869年）土地を返上、士族になる。

13代・貴典
本家吉貴の二男。嘉永6年（1853年）、大隅日向巡検で来垂した本家28代斉彬を迎えている。